

編集委員 〓 とうせ 〓 〓 奥泉光・島田雅彦・渡部直己 国書刊行会

Goto Meisei Collection

「内向の世代」の
旗手による、
いまこそ読まれるべき
珠玉の作品集
事物や人間の関係性へと思
索をめぐらし、鋭敏な批評
眼とユーモラスな姿勢を貫
いた作家、後藤明生。その
粒ぞろいの作品の中から、
後藤と縁の深い編集委員た
ちがセレクトした選りすぐ
りの作品を集大成。

第1巻 前期 I

雑誌出版界にうごめく人間たちの、徐々に入り組み複雑に錯綜してゆくさまざまな関係を、婦人雑誌の女性編集者の視点から、苦いユーモアと軽妙な筆致を交えて描き、文藝賞（中短篇部門）佳作となった「関係」。気鋭のファッション・デザイナーが主催するワイルド・パーティーに潜入取材を試みた週刊誌のゴースト・ライターが目にしたマスコミ業界で翻弄される関係者たちの浮薄で空虚な姿。お互いが笑い、笑われる非情な関係の中で織りなされるグロテスクな悲喜劇のうちに自らの存在証明を見出す人間を洒落な筆で描いた「笑い地獄」。同じアパートの隣室に住む独身女性のため、密かに自動式自慰機械の開発に没頭する無名の画家。製作開始から三カ月、あとは「偉大なる人工性器」が入手できればそれは完成する……宙吊り状態にある男の、内なる疎外からの脱出を目指す、奇行ともいえるべき戦いを笑いの含蓄を込めて描いた「ある戦いの記録」ほか、粒ぞろいの初期秀作八作を収録。

関係

無名中尉の息子

S温泉からの報告

階段

笑い地獄

パンのみに非ず

ああ胸が痛い

ある戦いの記録

第2巻 前期 II

週刊誌でゴースト・ライターをする男は、ある朝、自宅のベランダから見た富士山に名状しがたい衝撃を受ける。衝撃の正体も分からぬまま団地からの脱出を決意した男の脱出行を描いた「誰?」。会社を辞め職安に通う、東京郊外の3DKの団地に暮らす三十七歳の男の、団地という〈記憶を抹殺する流刑地のような場所〉での日常を描いた「何?」。あの外套はいつたどこに消え失せたのだろうか?

――二十年前に福岡から上京した際に着ていた旧陸軍の外套の行方を求めて、大学浪人時代を過ごした藤を訪れた主人公の想念は、生まれ育った朝鮮北部・永興で迎えた敗戦、親の郷里である九州への引き揚げ、筑前での中学・高校時代、学生時代の下宿生活へと脱線を繰り返しながら次々に展開する。「アミダクジ式」長篇小説の原点であり、後藤明生の小説作法のひとつの頂点を示す最高傑作「挟み撃ち」ほか、全七作を収録。

誰?

何?

隣人

書かれない報告

結びつかぬもの

疑問符で終る話

挟み撃ち

月報＝古井由吉・芳川泰久・青木淳悟

ISBN978-4-336-06052-5

2017年1月刊行予定

月報＝蓮實重彦・福永信・滝口悠生

ISBN978-4-336-06051-8

2016年10月刊行予定

第3巻——中期

笑坂、女街道、分去れ……信濃追分の地理と風物を背景に、かの地で遭遇した不可思議な体験を描く「煙霊」「石尊行」。朝鮮北部での澄明な少年期と敗戦の混乱、そして三十年後の平穏な日常とが綾なす人間存在の喜劇性と不思議を、望郷と断念の交錯する「二色刷りの時間」の中でとらえ、「夢のリアリズム」を追求した野心作「夢かたり」。かつて信濃追分宿に実在し、隠れキリシタンであったがゆえに処刑されたという遊女・吉野大夫。二百年前の伝説を探し求めるわたしが、定かならぬ伝承のラビリンスを自在に往き来するうち、いつしか小説は次々と自己増殖を重ね、ついには円環を完結する。谷崎潤一郎賞受賞作「吉野大夫」ほか、全十一作を収録。

煙霊

思い川

夢かたり

変容

鼻

智恵子の首

石尊行

針目城

麻氏良城

夢

吉野大夫

月報＝金井美恵子・佐伯一麦・朝吹真理子

ISBN978-4-336-06053-2

2017年4月刊行予定

第4巻——後期

信濃追分の山小屋で、スズメ蜂に刺され九死に一生を得たわたしは、その顛末と考察を「蜂アカデミー」へ報告すべく、古今東西の文献類を渉猟し、蜂の被害を報じた新聞記事を蒐集し、果ては蜂被害者の取材に大分へと出掛けていく。「蜂アカデミー」への報告に仮託した「蜂の博物誌」「蜂アカデミーへの報告」。ある時はマラーの交響曲を聴くために、またある時は宇野浩二の文学碑を訪ね、さらには大阪城公園を散策し、そこで知った「四天王寺ワッソ」の見物に出かけ……単身赴任の初老の男が、地図を片手に大阪の街を歩き回り、遂には「河内名所図絵」にてでくる新徳丸の遺跡・鏡塚へとたどり着く。大阪の日常を幻想空間へと異化する「マラーの夜」「十七枚の写真」「大阪城ワッソ」「俊徳道」ほか、全十六作を収録。

『饗宴』問答

謎の手紙をめぐる

数通の手紙

鰐か鯨か

蜂アカデミーへの報告

ピラミッドトーク

ジャムの空壇

禁煙問答

『芋粥』問答

マラーの夜

十七枚の写真

大阪城ワッソ

四天王寺ワッソ

俊徳道

賈俊徳道名所図会

しんとく問答

麓迷亭通信

月報＝黒井千次・阿部和重・柴崎友香

ISBN978-4-336-06054-9

2017年7月刊行予定

第5巻——評論・エッセイ 付年譜

多様な表現様式が渾然一体となり、あらゆる方向へと思考は連鎖し展開してゆく——小説とエッセイとの境目を自由自在に往復して織りなされる思考のアラベスク。後藤明生の面目躍如ともいえるべき傑作評論・エッセイを厳選して一冊に凝縮。巻末に詳細な年譜を付す。

※収録作品は変更になる場合があります。

収録作品
検討中

月報＝

高橋源一郎
斎藤美奈子
円城塔

ISBN978-4-336-06055-6

2017年10月刊行予定

[造本・体裁]

四六判変型 (190 × 132^{5/8}) ・上製ジャケット装

各巻平均 450 頁

装画＝タダジュン

装訂＝川名潤 (prigraphics)

編集協力＝市川真人・江南亜美子・倉敷茂

各巻予価：本体 3000 円＋税

第1回配本 第1巻「前期1」:

定価：本体 3000 円＋税

2016年10月刊行予定

以降3ヵ月ごとに刊行予定

国書刊行会

〒174-0056

東京都板橋区志村1-13-15

Tel. 03-5970-7421

Fax. 03-5970-7427

URL: <http://www.kokusho.co.jp>

E-mail: sales@kokusho.co.jp

後藤明生コレクション——全5巻

後藤明生コレクション

刊行に
あたって

その自由が
いとうせういこう

後藤明生作品をひとことで言うなら自由、になる。
ついでに自在と言っている。

科学や宗教や哲学のどこにも属さず、そのどれにも
介入出来るある種の“いい加減さ”。ゴールのないア
マチュアリズムのような、決して成熟を目指したりし
ない否定性の重なりのような、対象を表層的にだけ見
つめるユーモアのような、文の運動。

Ito Seiko

つまりそれは小説としか言いようのない存在で、文
学内の非嫡出子と言われる小説というジャンルの、後
藤明生作品こそが正嫡なのだわかる。その自由が。

飄逸の底

奥泉光

物語の力に依拠しながら、物語から逃れることが小
説というジャンルの要諦だとするならば、後藤明生は
それを楽々とやってのけているかのように見える。結
果、溢れ出る飄逸の味わいはほかに類がなく、しかし
その飄逸の底には、小説の歴史に対する、小説の魅力
に対する深い洞察があるので、物語への批評的距離の
取り方について、一字一字を原稿用に記す作業のただ
なか、後藤明生以上に神経を張り巡らせた作家はいな
いだろう。

Okuizumi Hikaru

最後に笑う人

島田雅彦

Shimada Masahiko

都市をそぞろ歩く時も、本を読み返す時も、誰かと
酒を酌み交わす時も、スズメバチに刺された時も、後
藤明生は常に感情に流されることなく、角度を変え、
脈絡を置き換え、ああでもないこうでもないという批評し
新たな定義をひねり出し、最後に笑う。このゴトー式
思考回路はゴーゴリ、カフカから受け継がれたもので
あり、現在も小説の豊かな地下水脈につながっている。
後藤明生は優れた語り手であり、批評家であったが、
しばしばその節操を踏み外すことによって、小説の定
義をも変えてしまった。

「散文」の気脈

渡部直己

後藤明生の出現とともに、日本の小説界に「とつぜん」ひとつの風穴が開く。そこから無類に明朗な生気が吹き出し、この国の、暗く湿りがちな小説風土に飄然と吹き渡りはじめる。爾来、半世紀。後藤的通気の触れるそばから、「詩」は揮発し、「ドラマ」は散逸し、「隠喩」が消え失せ……つまるところ、「散文」の純粹な生地が曝け出される。いかにも無邪気に、無造作に、しばしば無方向に、無手勝流に。ただし、そのつど目にもとまらぬほど敏捷な知性に導かれて。知性の最良の異称たるユーモアの、そのきびきびした脈動として——そうした「散文」の気脈に通ずること。後藤明生を読む悦びが、そこにある。

【推薦のことは】

いま、読むなら後藤である

（東京都立大学名誉教授／元近畿大学教授）

高田 衛

後藤明生の著作集が出て嬉しい。その編者たちが、島田雅彦・奥泉光・いとうせいこう・渡部直己という、かつて後藤

総長蓮實重彦等……。当時の近畿大には柄谷行人という大物も居たから、この間の大阪は華やかだった。

が気に入ってかわいがっていたメンバーであることも嬉しい。こうした人と人との組み合わせが、ひとつの時代を創るということはままあることなのである。

私は早稲田の二文時代から、後藤の知己であった。露文科の後藤に、国文学の私は「書く」と「読む」という千円札の裏表論で、さんざんに教えられ、議論した。生涯の仲になった。「書く」「読む」

後藤が死んでからもう十七年になる。死ぬ直前の五年間、彼は東京の文壇の衰退をなげき、そんなら大阪で盛りあげようと、さかんに東京から文学者を招いて、近畿大学などで語らせた。金井美恵子、

が一体になった時、小説は存在するというのだが、その一体性の中の幻影的な空間を書いた小説家は彼ひとりだと私は思う。

高橋源一郎、津島佑子、そして東大の元

後藤明生を読むなら今である。

Takada Mamoru

後藤明生 (1932-1999)

1932年、旧朝鮮咸鏡南道永興郡永興邑（現在の朝鮮民主主義人民共和国）で生まれる。1946年、38度線を越境、福岡県に引き揚げる。1953年、早稲田大学露文科入学。1955年、「赤と黒の記憶」が第4回全国学生小説コンクール入選。大学卒業後、博報堂を経て平凡出版（現マガジンハウス）入社。1962年、「関係」が第1回文藝賞中短篇部門の佳作となる。1968年、平凡出版を退社し、小説家専業に。1989年、近畿大学文学部教授、1993年に学部長となる。1977年に『夢かたり』で平林たい子文学賞、1981年に『吉野大夫』で谷崎潤一郎賞、1982年に『笑いの方法——あるいはニコライ・ゴゴリ』で池田健太郎賞、1990年に『首塚の上のアドルン』で芸術選奨文部大臣賞を受賞。

